

## 日中同時通訳における誤訳長文の特徴について

龐 焱

**A Study on the Characteristics of Wrong Interpretations of Long Sentences  
in Japanese-Chinese Simultaneous Interpreting**

**PANG Yan**

## 要 旨

本論文では、実例のデータの統計と分析を通じて、日中同時通訳における誤訳長文の特徴を纏めてみた。

日本人話者はスピーチの時に、よく長文を使うが、この長文の誤訳が同時通訳の質に大いに影響する要因であることがコーパスの中にあるデータと実例の分析を通じて分かった。その結果を踏まえて、誤訳に至る原因の改善の可能性について述べた上で、改善できる誤訳長文の特徴を纏めた。

今後は、本論文で纏めた長文の特徴に応じて、同時通訳の質を改善するための対応策について、引き続き、研究を展開していきたいと考えている。

**キーワード：**日中同時通訳、誤訳、長文、特徴、コーパス、実証研究

## Summary

This thesis discusses and summarizes the main characteristics of wrong interpretations of long sentences in Japanese-Chinese simultaneous interpreting. By analyzing data and examples from the corpus, it is found that long sentences are frequently employed by Japanese in their speeches and the wrong interpretations of long sentences are the main factor affecting the quality of Japanese-Chinese simultaneous interpreting. It is based on this research finding that the author summarizes the main characteristics of wrong interpretations of long sentences and identifies reasons for the mistakes.

In follow-up studies, the author will continue to explore viable strategies and techniques in order to improve the interpreting quality of long sentences in Japanese.

**Keywords:** Japanese-Chinese simultaneous interpreting, wrong interpretation, long sentence, characteristics, corpus, empirical study

## はじめに

龐（2014）は日中文法構造の視点から、事例のデータの統計と分析を通じて、日中同時通訳における誤訳長文に関する研究の必要性和意義を論じ、日中同時通訳の訳出の質を改善していくために、誤訳長文を導きやすい日本語文の特徴を見出すことが非常に重要なことを述べた。

本論文では、以上の観点を踏まえ、実証研究の方法により、日中同時通訳における誤訳長文の特徴を見出すことを目的とする。

### 1. 分析用の長文の定義と誤訳長文の選別法

#### 1.1. 本研究用長文の定義

文は、話者が情報を伝達するための最小単位であり、表現の形式から見ると、文書を記録するための構成単位でもある。文の長さと言うのは、一つの文の中で使用された語彙の量を指す。形式から見ると、日本語の文の長さは普通、二つの句点の間の“語彙”数量と見なされる。日本人は長文を使うことが得意だが、金田一春彦（1988:214）は、「日本人は、センテンスがはっきり切れてしまうのを恐れた。この結果、日本人は切れんとしては続き、縷々として数ページに及ぶような文をよしとした」と述べている。また「大まかに言うと、日本語の長文の特徴とは、つまり構造が複雑で、容量が大きいことである。それにより、複雑で、続いた厳密な思想を表現することが可能である」と張寿康と王福祥（1999）は指摘している。長文の定義に関して、台湾の有名な言語学者である湯廷池教授は、「長文は学術概念ではないため、長文に学術的な定義を与えることはできない」と述べた<sup>1)</sup>。「日本語の長文は、大きく分けて、二種類である（中略）。つまり、連用式長文と連体式長文である」と、魏育隣（2002:71）は述べる。連用式長文とは、「繰り込まれ長文」とも称され、かなり複雑な長文で、一つの文の中に、もう一つの文が繰り込まれていくことによって、多重的かつ立体的な構造を成している。

研究対象の全体的な大きさ及びその分布の離散程度はサンプルの容量を決める最も重要な条件である。一般的に言うと、全体的な規模が大きければ大きいほど、それに応じるサンプルの容量が大きくなる。全体的な離散程度が大きければ大きいほど、それに応じるサンプルの容量も大きくなる（龐 2014:44）。

以上の理由を踏まえて、研究の全体的な目標と条件を満たすために、同時通訳時に、話者の語速や停滞などによる通訳者への干渉を配慮した上で、本研究ではコーパス<sup>2)</sup>にあるソースランゲージ（以下はSLと略する）から70字以上の文を研究対象とする。その理由は、本研究は長文そのものを言語学レベルで研究するわけではなく、研究対象を一つの大まかな研究範囲内に限定し、その範囲内における日本語文の分布状況、誤訳文の割合、誤訳長文の特徴などが分

1) 筆者は訪問学者の身分で2010年5月から台湾輔仁大学翻訳学研究所で4ヶ月間研究をしていた。この間に、長文の定義について、湯廷池先生にお伺いした時、先生がそう回答してくれたのである。

2) コーパスの構成などの詳細内容は龐（2014）の説明文参照。

かれは、本研究の目的を達成できると思われるからだ。勿論、あくまでもこの設定は、さしあたっての大雑把な選別であるが、分析用の文の漏れがないように、目安として適用するものである。

本研究では、70字以上の文を研究対象として設定したが、70字未満の文（50～69字の文）を見落とすことは、本研究の目標の達成にどれぐらいの影響を与えるのか。同時通訳の際に、通訳者が短い文を誤訳した率はどのぐらいあるのか。短い文の通訳は日中同時通訳の難点であるのか。この一連の問題を解決するため、龐（2014）の準備研究<sup>3)</sup>ではすでにコーパスの中から抽出したデータに基づいた実例を分析した。紙面の制限があるため、分析のプロセスはここで重ねて説明しないことにした。分析結果によると、「本研究の目的に応じ、70字以上の文を本研究の研究対象とし、70字未満の文を捨てる考えは、本研究目標に与える影響は非常に小さくて、無視することが出来る」ということが分かった。

従って、後続研究における誤訳長文の分析と研究は、70字を最低限度とし、全ての研究対象は70字以上の長文に集中することにした。

## 1.2. 誤訳長文の選別法

誤訳の判断基準について、龐（2014）は、研究目的という見地から、文を分析単位とし、ターゲットランゲージ（以下は TL と略する）にある主要情報の漏れと誤りの量が25%以上であるものを誤訳文と見なす理由及びその根拠を述べた。従って、本研究では以下の分析方法に基づき、コーパスの中にある誤訳長文を選別する。

- (1) コーパス全体にある70字以上の文の TL の質を分析する。75%の正確率を基準とし、SL の情報の75%以上を正確に伝達できれば、合格した通訳と見て、SL の情報を75%未満しか正しく伝えていない場合には、この SL 文は誤訳されたものと見なす。
- (2) 同じ SL 文を通訳する場合、4名の通訳者の中に、2名又は3名以上の通訳者が以上の75%の基準に基づき誤訳したと判断された場合には、この SL 文は誤訳長文と見なす。

## 2. 全コーパスにおけるデータの統計分析

### 2.1. 全コーパスにおける文の統計状況について

以上の分析方法を踏まえて、筆者が全コーパスにある70字以上の文を対象として訳出された TL の質を分析し、2名又は3名以上の通訳者が誤訳した SL の文及びその誤訳した原因に個別に標識をつけた。最後の統計結果は次のようになっている。

全コーパスにある SL 文のトータル数：1018文

全コーパスにある SL 長文のトータル数：466文

全コーパスにある誤訳長文のトータル数：148文

---

3) 龐（2014）「日中同時通訳における誤訳長文に関する実証研究序説」では本論文の研究意義、研究方法、研究の手順などを説明した。

表にすると、以下の通りである。

表1 全コーパス SL 文の統計結果

誤訳長文数	長文数	文のトータル数
148	466	1018

以上の統計データに基づき、長文と誤訳長文の全コーパスの中における分布状況を把握するために、筆者がそれぞれの割合を計算してみた。計算した結果は以下の表2で示す。

表2 長文と誤訳長文が全コーパスの中における分布状況

長文が全コーパスに占める割合	45.78%
誤訳長文が全コーパスに占める割合	14.54%
誤訳長文が長文に占める割合	31.76%

この統計結果を纏めると、以下の通りになる。

- (1) 長文は全コーパスの中に占める割合が45.78%に達し、ほぼ半数になっている。この結果によると、会議発言の場合は、日本人の話者は長文を使用することによって、自分の意志を表す習慣があると見られる。
- (2) 誤訳長文が全コーパスの中に占める割合は14.54%だが、誤訳長文が長文の中に占める割合は31.76%に達し、その占める割合は相当大きい。

## 2.2. 誤訳長文が同時通訳に与える影響

言語というものは、情報伝達の道具とも言える。従って、誤訳は、話者と聞き手の間に情報伝達の損失をもたらすわけである。この損失をいかに計るのか。文の数量を考察するだけで、情報伝達の損失率を計るのは非常に難しいと思われる。従って、筆者は全コーパスにある SL 文の字数及び、長文と誤訳長文の字数を統計に取り、公式を通じて、計算をしてみた。この計算結果によって、情報伝達の損失率を手に入れる事を狙っている。

まず、筆者がコーパスにある日本語 SL の総字数、長文の字数と誤訳長文の字数をそれぞれ統計にして、計算をしてみた。統計結果を以下の表3で示す。

表3 SL 総字数、長文と誤訳長文の字数統計表

総字数	長文の字数	誤訳長文の字数
107405	75473	53885
100%	70.27%	50.17%

字数は完全に話者の話の中の情報量と同じとすることはできない。しかし、言葉は情報を乗せている道具であるため、話の中にある字数によって、定量的に話の中に含まれている情報の

量の大きさをおおむね評価することが可能だと言えよう。言い換えれば、一般的に、話者の話が長ければ長いほど、表現しようとする情報が多い。コーパスのデータで表現すると、字数が多ければ多いほど、表現している情報が増えていく。単一の語句にとっては、このような定量的な描写の誤差は比較的に大きいかもしれないが、多くの文語句から成り立っているコーパスの中で大量のデータを統計処理して、分析する場合は、字数と情報量との間の正比例の関係は客観的で、正確なものだと思われる。

従って、本研究では、字数によって情報の伝達量を表現することにした。使用する公式は以下のようにになっている。

- ・話の情報量  $\approx$  話の字数
- ・全データの中で長文が含んでいる情報量の割合  $\approx$  長文の総字数 / 総字数
- ・情報伝達の誤った割合  $\approx$  誤訳文の字数 / 総字数
- ・誤訳文長文による情報伝達の誤った割合  $\approx$  誤訳長文の総字数 / 総字数

以上の公式を踏まえて、本研究で必要となるデータを計算してみた。

- ・長文が含んでいる情報量の割合  $\approx$  70.27%
- ・誤訳長文に夜情報伝達の誤った割合  $\approx$  50.17%

以上2.1と2.2の統計結果を纏めて見ると、長文の誤訳は日中同時通訳の訳出の質に影響する非常に大きな現象であることが分かった。効率的に日本語の誤訳長文の問題を解決できれば、日中同時通訳の全体的な質の向上と改善に非常に重要な役割を果たせるだろうと思われる。従って、誤訳長文の誤訳原因と対応方略についての研究も極めて重要な意味を持っていると思われる。

### 3. 誤訳長文の誤訳原因の分析

誤訳原因の分析は全コーパスの中で展開する。具体的な分析方法は、以下のようなものである。

まず、会議別に誤訳長文の誤訳の原因を逐一に分析し、表4のように文の後ろにA~Gの符号をつけた。

表4 誤訳の原因と対応する符号

文型の影響	A
通訳者の専門知識の不足	B
通訳者の表現の間違い	C
話者の表現不明	D
個別的な言葉の理解による誤訳	E
数字の影響	F
その他の原因	G

さらに、同じ誤訳原因による誤訳文の数量をそれぞれ統計にした。その結果は以下の表5の通りである。

表5 誤訳原因の分析統計表

	原因 A	原因 B	原因 C	原因 D	原因 E	原因 F	原因 G
原因による誤訳文の数	94	15	9	18	20	13	4
誤訳長文の合計数	148	148	148	148	148	148	148
占める割合	63.51%	10.14%	6.08%	12.16%	13.51%	8.78%	2.7%

以上の表5は以下のコラム図でより客観的に、立体的に表現することができる。

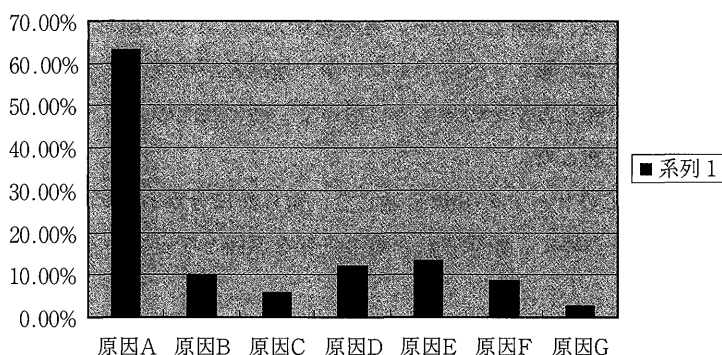


図1 原因別による各誤訳長文が全部の誤訳長文に占める割合

以上から次の5点が明らかになる。

- (1) 原因Aが占める割合は64%近くに達し、はるかに他の原因による誤訳の割合を上回っている。

例文1：従いまして、このブランドイメージを損なわないように、少なくとも、高い技術、世界レベルの高い技術を目指した目標を設定されるような施策を展開されたらどうかと、いうように…… (2007 広東経済発展国際諮問会)

この文を誤って通訳した通訳者は2名だった。誤訳されたTL文はそれぞれ以下のようになっている。

通訳者 P<sup>4)</sup>：

因此，品牌形象，为了要维持这个品牌形象，所以我们必须要向，有相当高的，在全球相当高的技术。这个高水准的技术呢就，应该是我们的目标。

(従いまして、ブランドイメージ、このブランドイメージを守るために、我々が、相当、高い、世界で相当に高い技術に、向かわなければならない。このレベルの技術が、我々も

4) 通訳者の名前の頭ピイインを使用し、通訳者の実名を代替している表示である。

目標であるべく。)

**通訳者 D :**

要如何做到，不毀損企业的品牌形象，并且去追求企业的利益，必须要创造这样子的目标，才有办法做出一个真正的技术革新。

(いかにして、企業のブランドイメージを損なわないのか、そして、企業の利益を求めると、このような目標を作るべきだ。そうすると、本当のイノベーションが出来るわけだ。)

以上の通訳文を見てみると、2名の通訳者が話者の話の中にある中心的な言葉、「目標を設定される」と「施策を展開され(たらどうかと)」が理解できなかつたと見られる。SL文の構造から見ると、以上の二つの文節は文の後ろに来過ぎているため、通訳者が、同時通訳の限られた時間の中で、この二つの文節を全部聞き終わってから纏まった意味を伝えることが出来ず、話者の話を聞きながら、理解しながら、意味を伝えることしか出来なかつたのであろう。二つの文節の内容はそれほど難しい内容でもないが、通訳者が話者の考え方と喋りたい事に通じていないため、話者の喋り方やその考え方に沿って、話の展開の方向と内容を推測していくのは非常に困難なようであった。

コーパスにおける全てのデータの分析を通じて、明らかに分かったのは、原因 A による誤訳はかなり大きな割合を占めて、誤訳された最も主要な原因となっていることである。

- (2) 誤訳にいたる原因 E は、誤訳原因に占める割合は13.51%であり、第二位であることが分かった。しかし、この割合は第一位の原因 A の割合と比べると、かなり差があることも分かった。

例文 2 : 労働集約型中心産業の成長モデルの見直し、ハイテク産業、ハイテク製造業の誘致を進める動きが活発でございまして、今後イノベーション能力の高度化等がポイントというふうに考えております。

(2009 広東省兵庫県経済促進年次会)

この文を間違っして訳した通訳者も 2 名であった。

**通訳者 D :**

要将，要~将一个劳动密集的产业改~转型，并且去引进高附加价值的产业，未来势必会产生一波，新一波的创新工业。

(あのう、一つの労働密集型の産業、~を転換し、しようと、そして、高付加価値の産業を導入しようとするなら、将来は、必ず、一つ、一つ新しい、イノベーションの工業を作り出します。)

**通訳者 Y :**

所以，呃，从以劳动为中心转为，呃，IT 的一个动向是非常明显的。所以未来，呃，这劳工的一个人力的高涨是必要的。

(ですから、えっと、労働を中心とし、えっと、IT に転換する動向は、非常に明らかです。ですから、将来、えっと、この労働者の賃金の値上がりも必要です。)



2名の通訳者は話の中の「イノベーション能力の行動化等」の「行動化」がよく理解できていないようだ。正確な意味は「創新能力的升級」或いは「提高创新能力」であるが、通訳者Dは、「新一波的创新工业」に、通訳者Yは「人力的高漲」に訳してしまい、話者が表現しようとする意味と全く違っていることが分かる。

(3) 第三位と第四位である誤訳原因のDは、12.16%の割合を占めている。

例文3：この資本、イノベーションの資本条件ってということで、まあ、あの、日本の例でも中小企業庁がああ、中小企業の、この、あの、ええ、ファンドを作りまして、がんばればファンドとか、それから私どももたとえば、中小企業庁と私どもの会社が一緒になって、ネクストファンドとか、ま、規模は四兆億円とか五兆億円ぐらいの規模ではありますけども、たとえばそういうのを作って、何とかこの新しいベンチャー企業の進出のようなことをですね、援助する、応援するというようなことをやっております。(2007 広東經濟發展國際諮問会)

以上の話を聞いてみると、話者の話の目的は最も分かりにくい。話の最初は、話者が「イノベーションの資本条件」を言い出したため、話は「資本条件」を巡って展開していくのではないかと思われたとたんに、「日本のファンドの創立」に飛んでいってしまい、それぞれ日本の各ファンドの具体的な状況、取り扱い方法と具体的な金額の説明をしながら、最後になると、これらのファンドの目的に返ってしまった。基本的に、最初に出てきた話題の「イノベーションの資本条件」と何の関係もない話になってしまったようであった。このように話者が、喋りながら、考え直し、考え直しながら、喋っていくとの話し方であったために、話者の話の主旨つまり目的を理解することは、同時通訳者にとって非常に難しいこととなり、自分なりの推測能力を発揮する事にも大きな障害をもたらしているようである。同時通訳の通訳文を見ると、4名の通訳者全員がこの文を誤って訳していることがわかった。

(4) 誤訳原因のF、つまり、数字の影響による誤訳文の割合は8.78%も占めており、通訳者に大きく影響する要素であることがわかった。

例文4：兵庫県の人口は約560万人、GDPは人民元で約1兆3,600億元、日本円にしますと約20兆円でございます、広東省のほぼ半分に相当いたします。

(2009年広東省兵庫県經濟促進年次会)

例文4の話はいくつかの数字が連続して出てきている。数字が大きくて、しかもそれぞれが何の関連もないため、通訳者に大きな困難を与えているようである。以下通訳者の通訳した文を見てみよう。

#### 通訳者P：

人口等于560万人，GDP (p)<sup>5)</sup> (3) 大概是20兆日元的的一个产值，是在兵庫县的大概一半左右。

(人口は569万にイコールします。GDP (p) (3) 20兆円の売上高で。兵庫県の約半分ぐらい

---

5) このPはPAUSEをあらわしている。数字はPAUSEした時間を表している。秒を単位としている。

です。)

**通訳者 A :**

GDP 是人民币一兆三千六百亿元，日币，二十兆元，广东省の大概一半。

(GDP は人民元一兆三千六百億元、日本円、二十兆元で、広東省の約半分です。)

以上 2 名の通訳者は正確に話の中の全ての数字を聞き取れておらず、全力を尽くして、その中のあらゆる数字を全部把握しようとしている内に、数字と関連している情報、例えば、数字が何を代表しているのか、数字の単位は何かといった情報を聞き逃してしまい、纏まった情報の理解と表現が出来なくなっている。

- (5) コーパスの中のデータを統計処理して、分析した結果、以上の主要な誤訳原因の他にも、誤訳された原因が分かった。例えば、話の中にある情報の密度が多すぎることで、通訳者が自己表現しすぎるなどである。しかし、これらの要素が本コーパスの中で占めた割合は約 2.7% で、比較的小さいので、本論文では、これらの誤訳原因を特に取り上げないことにした。

以上、全コーパスの中における誤訳原因の分析を改めて纏めると、日中同時通訳の中で、誤訳に至る最も大きな原因は、日本語の文型の複雑さにある。つまり、日本語の文が長すぎ、文の修飾成分が多すぎる上、話者の主な意図と目的などを示す重要な成分を後置しすぎることで、通訳者が最後まで待ちきれず、誤って意味を伝えてしまったことである。その他の原因は、文型の影響と比べたら、占めている割合は小さく、わずか 10% ぐらいであったことが分かった。

## 4. 全コーパスにおける誤訳長文の文型特徴の分析

### 4.1. 誤訳長文の改善可能性の分析

以上の誤訳に至る原因のうち、客観的な存在で、単なる通訳者個人の努力だけで改善できるものではないものと、主観的なもので、通訳者の勉強とトレーニングによる改善が可能なものと分類し、考察してみたい。

まず、誤訳の原因に占める割合が大きくない原因から見てみよう。

誤訳原因 E、つまり通訳者が極少数の語彙を理解できないことによる誤訳の場合は、通訳者本人の言語能力の問題だと考えられるだろう。一番基本的な解決案として、日ごろから、なるべく多くの単語と用語を積み重ねていくしかないと思われる。

誤訳原因 D の場合、問題を発生した主な原因は、話者側にあると考えられる。話者の話の特徴、癖と物に対する考え方はすべてスピーチの効果に大いに影響している。話者の話の特徴によって、話が分かりやすくなるのか、分かりにくくなるのか、決められているので、通訳者が自分の意志でコントロールできる要素ではないと思われる。通訳者が出来ることは、スピーチに発言者の話し方に適応し、話者の話の意図の理解に努め、話の中に出てきた言葉と表現

を通じて、全面的に話の流れを理解した上で、捕まえた意味をきちんと整理してから伝えていくことであり、それが重要な対応法の一つになるのではなかろうか。

誤訳原因 B は通訳者の専門知識の不足による誤訳である。専門知識は尽きることのないもので、通訳者自身でも、仕事が回ってくる前に、今度はどのような内容の会議をするのか見当も付かない。従って、通訳者は準備時間の不足、準備不十分などの原因で、同時通訳の際に、多かれ少なかれ専門用語や専門知識の不足による混乱に直面せざるを得ない立場になってしまう。いかにして、誤訳原因 B による困難を減らしていくのか。筆者の通訳経験から見れば、通訳者は、日ごろに各分野における知識の勉強と蓄積、視野の拡大をする必要があると思う。そして、同時通訳の仕事を引き受けてから、直ちに十分な準備をし、会議内容に関連しそうな全ての専門的背景や、専門用語などをしっかりと勉強する必要があるだろう。

誤訳原因 F である数字の干渉は、通訳者に大きな妨げであることが通訳界の共同認識である。筆者本人でも大変苦勞をしてきた記憶がある。短期間内に全ての数字を覚えて、しかも、数字が表現している意味と数字の単位を直ちに覚えた上で伝えるのは、苦勞の中の苦勞と言えるほど難しいと思われる。通訳者にとって、最も効率的な解決案は、事前に会議の主催者側、又は話者本人と打ち合わせて、事前に出てきそうな数字を把握することである。もう一つの方法として、日ごろから、数字のトレーニングを強化することである。頻繁に数字と接触することによって、数字に対する敏感度を強めていくことも数字通訳をレベルアップさせる有効な方法である。

割合が一番高い誤訳原因の A——文型の影響について、状況はかなり複雑である。これらの文はどのような文型特徴を持っているのか。そして、これらの文型特徴に応じた解決方策があるのか。文型影響による誤訳を完全に解決できなくても、せめてある程度通訳者が通訳作業中に感じたプレッシャーを解消し、ある程度日中同時通訳の質を改善できれば、日中同時通訳における貢献を果せると言えるだろう。

## 4.2. 誤訳長文の文型特徴のまとめ

以上の理由を踏まえ、筆者は全コーパスのデータに基づき、誤訳長文にはどのような文型特徴があるのかを分析し、研究をすることにした。

### 4.2.1. 日本語の長文の分類

「日本語の長文が分かりにくい。分かりにくい長文は“つなぎ長文”ではなくて、“繰り込まれ長文”だと思われる」(魏育隣 2002:72)。つなぎ長文は、若干の短文を時間の順かロジックに従い、途切れずに連なっている文を指す。例えば、

家の裏に出てみると、麦畑は、もう柔らかかその緑に色どられて美しく見渡され、むこうの林からは、聞こえようが、聞こえまいが、人の世にはおかまないなく、ウグイスは、その声を響かせてきて、やはり、春だなあ、と感ずる。 (『新撰現代国語一』尚学図書)

繰り込まれ長文は複雑で、一つの文の中にもう一つの文を繰り入れることによって、多重の、

立体的な構造が成り立っている。例えば、

原始人にとっては、多くの場合その部族を守ってくれる神によって具体的に決められた、その部族すなわち人間社会のただ一つの正義に反するものは、すべて不正とされた。  
(樺島忠夫『文章作法事典』)

このような長文は、つなぎ長文のように、途中で途切れて、若干の短文に区切ることが出来ない。そのかわりに、この文を解体して、若干の部分に分けることができる。

原始人にとって、ただ一つの正義がその部族すなわち人間社会に存在する。  
この正義は多くの場合、神によって具体的に決められる。  
そしてこの正義に反するものは、すべて不正とされた。

この長文は少なくとも以上のような三つの短文によって繰り込まれているものである。

普通、分かりにくいと言われている長文は恐らくこの“繰り込まれ長文”を指していると思われる。この“繰り込まれ長文”は構造が複雑で、容量が大きいとの特徴があるため、よく複雑で、厳密的、かつ連続的な思想を表現する文に使用される。

研究の便宜を図るために、筆者がデータを分析する際に、この“繰り込まれ長文”と“つなぎ長文”の分類基準を参考にして、全コーパスの中にある文型の原因による誤訳長文の分析と統計を行うことにする。

#### 4.2.2. 本コーパスにおける文型の影響による誤訳長文の特徴分析

本コーパスにおける文型の影響による誤訳長文は全部で94文であり、この94文の誤訳長文を分析した結果は、共通性がない誤訳長文の2文を除いて、それ以外の誤訳長文はすべて“繰り込まれ長文”であることが分かった。

筆者は92文の誤訳長文を分析し、以下の文型特徴を纏めた。

##### (1) 連体修飾語が長くて、文の中心成分である述語動詞が後置し過ぎるタイプ。

述語動詞が後置し過ぎるため、中訳をする際に、通訳者は長く待たないと、話者がどんな態度を取り、どんな動詞を使うのか、非常に分かりにくいので、SL文を正確に組み立ていくのはなかなか難しい。同時通訳の場合は、特に時間の制限によるプレッシャーをかけられ、通訳者が話者の語速に追いついていくために、話の前後の文脈、または、通訳者本人それぞれの語感によって、述語動詞を当ててみざる得ない。一方、話者の述語が出てきた一瞬に、通訳者が一旦自分の選んだ述語動詞が間違っていることに気が付き、話者の正確な意味に戻るため、TLの文を再度、調整し、組み立てせざる得ない羽目に陥ってしまう。こういう事態になると、通訳者は時間がない、または、労力の分配が出来ないため、仕方なく、間違った表現をそのまま放置して、直すのを諦めてしまうしかないだろう。

こういう文型特徴を持っている例文を見てみよう。

表6 連体修飾語が長く、文の中心成分である述語動詞が後置し過ぎるタイプの例文

SL	通訳者 P	通訳者 A	通訳者 D	通訳者 Y
ええ、私は偶々、あの、日本で、一千社以上が会員であります、知的財産協会、の、チーフをしてありますが、あの、日本の企業は、多く、大変多く、この広東省で、え、物造りをする、実際にやっておりますが、え、まだまだやりたいという企業が多いのは事実であります。	日本有一千家公司以上作为成员的智慧，智慧财产权的一个组织，(p)(4)日本有许多企业在广东省从事制造业，不过，仍然有许多的企业希望能够投身广东省，	我只是偶然，在日本呢，看见了一千个公司，我是会员的一个，恩，智慧财产协，协会的一个领导人物，那么日本的企业呢，非常多在，广东省，恩，从事，恩，创造，从事制造。那，其实呢，事实上还有很多企业想要从事这方面。	我刚好 (p)(2) 参与，有一千个，一千以上的 (p)(3) 成员，拥有一千以上企业成员的，诶，智慧，智慧保障协会，(p)(3) 我也参与，在广东省参与制造业，这是有很多企业都有兴趣从事制造业，恩，制造，	在，有一次偶然之间呢，(p)(4) 我曾经，恩，(p)(2) 就是我任的，就任一个日本的智慧财产权的一个有一千家公司智慧财产权协会的一个主任呢，日本呢，基本上，在做一些新的设计的时候呢，虽然我们已经在做很多的技术创新的，不过还有陆陆续续更多的公司想要来参加。

以上の文はこの特徴を持つ最も代表的な文である。「ええ、私は偶々、あの、日本で、一千社以上が会員であります、知的財産協会、の、チーフをしてありますが、」この従文の述部は「チーフをしてありますが」であることがはっきりしている。「チーフ」にかかる長い連体修飾文は構造が完全であるため、通訳者は自然に連体修飾文における述部「会員であります」、そして、この述語動詞によって、発言者の言いたい意味を判断したようである。故に、以下の TL が先にあったわけである。「日本有一千家公司以上作为成员的智慧，智慧财产权的一个组织，」(通訳者 P)；「我只是偶然，在日本呢，看见了一千个公司，(通訳者 A)」；「我刚好 (p)(2) 参与，有一千个，一千以上的 (p)(3) 成员，拥有一千以上企业成员的，诶，智慧，智慧保障协会，(p)(3) 我也参与，(通訳者 D)」。最後の述語動詞「チーフをしてありますが」が出てから、通訳者たちは、それぞれ自分の TL を直そうとしたが、しかし、この直すプロセスは非常に難しく見える。通訳者 A は、ポーズが長く (4 秒も止った)、重複が多いにもかかわらず、最後になっても、正確な意味に戻れなかった。通訳者 P と通訳者 Y は TL 文の修正を諦めて、SL 文の誤訳になってしまった。この文を正しく通訳したのは通訳者 D だけだった。しかし、TL 文を分析すると、通訳者 D も修正に大変苦労したことが分かる。「在，有一次偶然之间呢，(p)(4) 我曾经，恩，(p)(2) 就是我任的，就任一个日本的智慧财产权的一个有一千家公司智慧财产权协会的一个主任呢，」この中には、異常なポーズが二箇所もあり、その内の一つは 4 秒もあったからである。

## (2) 連体修飾節の中にある述語が主節の述語に接近するタイプ

連体修飾節の中にある述語が主節の述語と比較的近い、かつ、連体修飾語が一つ又は二つ以上独立している文節から成り立っているものであるため、通訳者が、この従節の最後の述語を主節の述語と間違え、中国語に訳してしまうことによって、発言者の伝えたいインフォメーションが誤ったり、漏れたりしてしまうことに至る。

例えば次の例がある。

表7 連体修飾節の中にある述語が主節の述語に接近するタイプの例文

SL	通訳者 P	通訳者 A	通訳者 D	通訳者 Y
そして、ええ、2002年以降も、おお、何とか改正をされてきています。ええ、従来のその省エネ法がカバーしていた工場の範囲を広げたり、あるいは、電力だけではなくて、熱と、電気と、一体的な管理を要求したり、ええ、あるいは、ああ、工場単位だった、ええ、管理を従業者の単位にするとか、いろいろな形で、ええ、縛りを強くしてきています。	而在2002年以，之后呢，也做了几次修正。以往的节能法，我们扩张以往节，我们将呢，试用工厂扩张，或者是在呢，(p)(4)或者是在原本呢，或者将原本是以工厂为单位的改为，以事业者为单位，或者是针对热能以及电力呢，做统筹的管理。	2002年以后也有陆续续修法。原本的节能法涵盖的范围，把它扩大，工厂，有对象工厂，还有电力以外，热能，电，一体管理，也是要求范围。还有工厂为单位的，工厂为单位的改为各个，工作单位为单位。	在2002年之后，也经过数次的修改，(p)(4)来扩张了需要管制的工厂数量，还有不只是电力，还有对于热能等等的一体管理，还有各个，以原本一个工厂的，为单单位的管理成为业者为单位的管理，	那么2002年之后也有几次的修正，其实跟之前的省能法所涵盖的这个省能的一个法案的范围扩大，或者其实不单单只有火力，其他的也当做是对象。或者是本来是以工厂为单位的这种规定呢，成为这个生产者的规定。那其实这样的一个束缚越来越强化，

以上の例文の主節述語は「(縛りを) 強くしてきています」であるが、主節の目的語の前に「……範囲を広げたり、管理を要求したり、単位にする」という三つの述語を中心成分とする連体修飾の従節が出てきて、しかも、二つの連体修飾の成分も構造が複雑なため、通訳者 P、通訳者 A と通訳者 D はこの文を処理する際に、正確に主節の述語動詞「(縛りを) 強くしてきています」を訳出できず、意味の伝達はただ「……単位にする」に止まり、その結果として、話者の言いたい主旨をはっきりと伝えられなかった。

(3) 中訳する際に、日本語の後置助詞などの成分を前置する必要があるタイプ

SLの中に、数多くの前置助詞がある。例えば「……によって、……と共に、……のために」などの後置助詞が話者の話の中で頻繁に使われている。これらの後置助詞は中訳する時に、文の最初の位置に持っていかないと、話を始められない。例えば、日本語の発話、「我々の経験に基づき」を中訳すると、先に、「基づき」を訳出してから「我々の経験」を表現するので、「根据我们的经验」になる。このような日中表現構造の差異により、通訳者の理解と表現に影響が及び、誤訳になってしまう。特に、話が長く、複雑になる場合、通訳者が、話の語順に沿って、通訳が終わったと思った途端に、後置助詞が現れたので、慌ててもう一度 TL の語順を整理し始める。このようなことにより、誤訳或いは、情報の漏れになってしまう例が数多くある。

例文の中には、後置された表現が二つもある。一つ目は、「～をはじめとして」、もう一つは、「～に伴って」、それぞれ、訳すると、「以……为代表的」と「伴随着……」となる。つまり、この二つの表現を中国語に訳すと、後置された成分を中国語の文頭に持っていかないと、中国語の表現を始めることが出来ない。特に、一つ目の後置助詞の後に、「デジタル家電などの新規成長分野への投資も増えておりまして」という文がすぐについてきた。この文の助詞「へ」は方向を表していて、後置助詞ではないにもかかわらず、中訳する時、日本語の後置助詞と

表 8 中訳する際に、日本語の後置助詞などの成分を前置する必要があるタイプの例文

SL	通訳者 P	通訳者 A	通訳者 D	通訳者 Y
近年になりまして、先程申し上げました、パナソニックのプラズマディスプレイパネル工場をはじめとして、デジタル家電などの新規成長分野への投資も増えておりまして、中国、アジア市場の拡大に伴って、鉄鋼、造船、建設機械などに強みを発揮しています。	而近年呢，我们刚刚有提到 panasonic 的电浆显示器，面板工厂等等在家电上面我们的投资，在新领域的投资也增加了，在中国亚洲市场的扩大，随着这个扩大呢，在钢铁造船建设机械方面呢也是我们的强项，	刚才提到的 Panasonic 的电浆，面板，等等，以及中国亚洲市场扩大，所以钢铁造船、建设设备，机械方面也发挥优势，	恩，Panasonic 的一个电浆面板工厂等等的，数位家电也不断成长之中。中国，随着中国亚洲市场的扩大，钢铁造全，船等等建设机械也不断地提升。	那么刚刚所提到的 panasonic 的一个，这，电浆显示器工厂，呃，等等，其实新的成长也有透支。那么，还有中国亚洲市场扩大，随之钢铁造船，其实机器设备也在增加。

まったく同じく、文頭に持っていかなければならない表現の一つである。具体的に言うと、この文を正確に訳すと、「向数码家电等新兴领域方面进行的投资业也在增加。」となるが、通訳者が情報が入ってくる順番に沿って表現すると、「数字家电等新兴领域」「对」「的投资」「也在增加」に理解しがちである。母語が中国語である通訳者がこの文を理解する時、このような思考を保っていることが分かる。

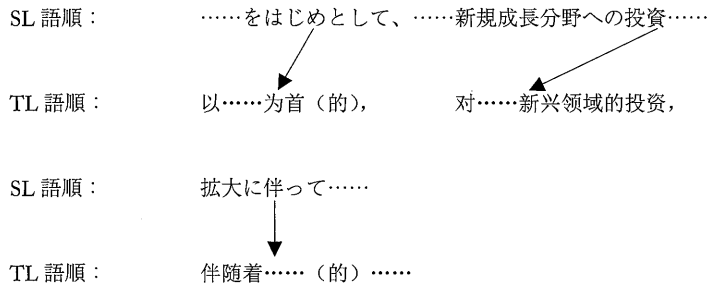


図 2 日本語後置助詞の通訳思考図

以上の図から分かるように、中訳をする時、三回も後置された成分を文頭に持っていかなければ成らないため、通訳者は完全に混乱し、誤訳してしまうことになった。

#### (4) 連体修飾語が複雑すぎるタイプ

このタイプの長文は比較的複雑で、以上(1)(2)(3)の三つの現象を一体化していると言える。このような長文であれば、すべての中心成分、例えば、述語と目的語にかかる修飾成分は複雑である。同じ文でも、各修飾成分は、タイプ(1)であったり、タイプ(2)であったりしている。これらの文に対する処理は、通訳者にとって、非常に難しい。通訳者はよく修飾成分の中の細部に縛られているため、主要成分である述語動詞や目的語を無視してしまうことに至る。故に、話者の本当の意味を間違えてしまう。

例文を見てみよう。

表9 連体修飾語が複雑すぎるタイプの例文

SL	通訳者 P	通訳者 A	通訳者 D	通訳者 Y
従いまして、このブランドイメージを損なわないように、少なくとも、高い技術、世界レベルの高い技術を目指した目標を設定されるような施策を展開されたらどうかと。(いうように考えます。)	因此，品牌形象，为了要维持这个品牌形象，所以我们必须要向，有相当高的，在全球相当高的技术。这个高水准的技术呃就，应该是我们的目标。	因此，为了不要损害企业形象，把目标放在世界，世界级的技术，这是很重要的。	要如何做到，不损害企业的品牌形象，并且去追求企业的利益，必须要创造这样子的目标，才有办法做出一个真正的技术革新。	

以上の例文の構造は以下のように分析することができる。

従節1：

従いまして、このブランドイメージを損なわないように、

従節2：

少なくとも、高い技術、世界レベルの高い技術を目指した目標を設定されるような施策を展開されたらどうかと。(いうように考えます。)

従節2の修飾関係を以下のように分析をすると

- ①高い技術、世界レベルの高い技術を目指した  
↓ 連体修飾語
- ②目標を設定されるような  
↓ 連体修飾語
- ③施策を展開されたらどうかと。(いうように)

以上から分かるように、構造が非常に複雑なため、通訳者が短い間に全ての情報を理解し、表現するのは不可能なほど、難しいのである。4名の通訳者のTLもこのことを示している。通訳者Yは完全に反応できなかった。その他の3名もなかなかうまく通訳できず、発言者の重要な情報を全員とも伝えることができなかった。通訳者Pの訳文を通じて、各連体修飾語及び連体修飾語の中にある複雑な構造が通訳者Pに与える影響がはっきりと見える。通訳者Pの通訳文は基本的に①、②、③の文節ごとに区切って通訳したため、中国語の表現を立て直す時も、この三つの文節の中で交替に処理していた。このプロセスの中で、あまりに調整しすぎたため、通訳者Pは結局頭を整理できずに、訳した内容は間違っていた。



## 5. 終わりに

以上の分析結果を纏めて見ると、以下の通りになる。

- (1) 長文の誤訳が同時通訳の質に大いに影響する要因である。
- (2) 日中同時通訳の中で、誤訳に至る最も大きな原因は、日本語の文型が、通訳者にもたらした影響である。
- (3) 改善できる誤訳長文のタイプは主に四つのタイプがある。

以上の研究結果を踏まえて、今後、改善できる誤訳長文の各タイプごとの対応策及び通訳の質を改善するための具体的な方法と技巧の研究を重ねるとともに、それらの対応法をどのように通訳教育に応用していくのかといった点についても考えて行きたいと思う。

## 謝 辞

この研究は広東省教育庁特色創新項目（教科研類）「日本語翻訳専攻修士実用型人材育成新方法探索」、2014年広東省人文社会科学基地広東外語外貿大学翻訳研究センター項目「日中同時通訳長難文の研究」、課題番号 CTS2014-10、2014年度広東外語外貿大学省級高等教育教学改革項目「広東経済社会発展新戦略語境における日本語人材育成モデルの革新」、課題番号 GDJG20141099によって、支えられていることを感謝して記す。

## 参考文献：

- 金田一春彦 (1988). 『日本語』新版 (下)』岩波新書  
山田孝雄 (1936). 『日本語文法学概論』宝文館出版  
砂川有里子 (2005). 『文法と談話の接点』くろしお出版  
尚学図書 (1998). 『新撰現代国語一』尚学図書出版  
樺島忠夫編 (1979). 『文章作法事典』東京堂出版  
張康寿・王福祥 (2001). 『日本文学論文集』北京：外語教学与研究出版社  
魏育隣 (2002). 『日本文体学』長春：吉林教育出版社  
龐 焱 (2014). 「日中同時通訳における誤訳長文に関する実証研究序説」(『神戸女学院論集』173号)  
龐 焱 (2013). 『日中同時通訳長難文とその対応策』武漢：武漢大学出版社

(原稿受理日 2014年12月8日)